

儲 叶明（チョ ヨウメイ）
中国出身／2019～2020 年度奨学生
筑波大学 人文社会科学研究科 博士課程

1. 「虫の目」で世の中を見る

トンボなどの昆虫の目を顕微鏡でみると、蜂の巣のように、無数の小さな「目」が集合した構造になっている。この構造が「複眼」だと呼ばれ、「360° の視野」を獲得し、外敵から自身を守ることができる以外、動きを敏感に検知できることや偏光をみることもできる。私が日本にきてよかったですとは、一言で表すのならば「より多角的に物事を見られるようになった」ことである。2016 年に渡日するまで、中国での経験しか持たない私にとっては、人間の「単眼」から虫の「複眼」に進化したようなことである。物事を観察するときに視点のシフトができるから、今まで気づきもしない微細なところにも目が行き、より繊細な感受性で日中両国の社会を捉えるようになった。いわゆる「異文化理解」の話なのだろう、と言われるとそれまでの話だが、実はそれだけの話ではない。

大学時代、日本語を練習したいという要望もあり、多少無理をしても当時学校にいる数の少ない日本人先生と、様々な機会を作つて世間話をしようとしていた。ある日たまたまお昼ご飯の話題になり「先生は普段、どこでランチを食べられていますか？」と尋ねると、先生は「ランチは持参した弁当を食べることが多いです。学校の食堂もたまには利用しますが、中華は油が多くて、毎日食べ続けるのは日本人には少し大変かもしれません。」と答えた。当時 18 歳で、二人前の料理を普通に平らげていた私は、和食にはさっぱりとした料理が多いとは知っていたけれど、中華にも野菜の料理がたくさんあるので「そんなに違うの？」と思わず首をかしげていた。実際、日本で何年間暮らした今は、油一滴も使わずにキャベツを千切りしてそのまま食べる日本人が、同じ野菜でも油たっぷりに炒める中華を食べ続けるとつらく感じるのも当然だと強く共感できるようになった。というのは、何年間日本での生活を続けているうちに、自分も油の多い食生活を続けると胃もたれる体質になってきているからである。「日本にはさっぱりした料理が多い」という知識だけでは、とても納得できなかったことである。

もう一例を挙げる。2011 年、およそ 8 年前の上海である。当時日系企業に勤めていた私は、本社の同僚が連れてくるお客様を出迎える仕事をよく任されていた。予定時刻より早めに空港に着いた場合は、いつもちょっとした人間観察をしていた。その時に気づいたのが、日本人のビジネスマンは、横型のコンパクトな黒いスーツケースを持ち歩く人が多いということである。しかし当時の私は、スーツケースは 26、小さくとも 24 インチの縦型のものを好んでいたので「なぜ日本人はあんな小さいスーツケースを愛用しているのだろう」と不思議に思った。おそらく、持ち運びやすい、負担にならないからだろうといくつかの理由を考えていたけれど「それにしてもスーツケースは容量が大事じゃない？」と、なかなかそれがほしいとは思わなかった。日本で 4 年間暮らした今からしてみると、日本

でラッシュの時間帯に電車に乘ろうとすると、ただでさえぎっしりの満員電車で荷物を運ぶハンドルを度外視しても、大きいスーツケースを満員電車に持ち運ぶには、他人の目線を気にしない勇気すら若干必要だ。また、東京・渋谷・新宿駅などの人の密度が高い場所での移動には、普段でもストレスが感じられやすく、それが早朝の出勤ラッシュの人込みの中をすり抜けるビジネスマンのことを考えると、確かにコンパクトであるほうが、小回りが利いて便利である。それに、宿泊先によっては、大きいスーツケースだと荷物置き場の仕切りに入らない可能性もある。小さい横型のスーツケースならば、ぎりぎりのエレベーターでもストレスなく乗れ、人混みの中をすいすい通りぬけられ、宿泊先でも気軽に預けられる。「こんなにメリットがあるんだ、自分もほしくなった!」と思うが、実際に日本で暮らしてみると、なかなか心底から共感できない。

以上の二つのエピソードを通して何を言いたいかというと、「普通はこうだろう」という自らの先入観に噛み合わない物事に対して、その背後にある理由を「知識」としてそれとなく知っているのと、実際に体験し、「肌で感じる」のとは、また違う次元の話なのでということである。異文化理解において、「心底から共鳴しないと、本当の理解には繋がらないんだ」と日本に来てからつくづく思った。

2. 奨学生期間中にできしたこと・将来計画

このような「複眼」の視点を獲得したのも、1年間、財団の各種のイベントに参加させてもらったおかげである。実は、1節と2節で記述した諸観点が、当初志望動機に書いた「より場面・状況を重視した日本語」を教えることにもつなげられると思う。なお、1節で述べたように、「知識」としてなんとなく知っているのと、実際に体験するのとはまた違う話なので、このような意味で、歌舞伎の鑑賞、富士山の合宿、クラシックコンサートの鑑賞会からも非常に良い体験をさせてもらった。このような体験は、今後教育の現場に立つ筆者のネタ、糧になるに違いない。また、将来、筆者の目標は、日本語教育に従事するだけでなく、一人の社会言語学の研究者としても活動したいので、そのために、2019年度では学会発表及び学術論文の投稿にも積極的に従事してきた。

目標にはまだまだ遠い道のりであるが、このように自分の目標に向けて少しづつ近づくことができたことも、財団の支援がなくてはとてもできないことなので、心より感謝している。来年度の計画も既に立てている。学会発表2回、投稿1本を予定している。

この1年で成長したことと言えば、修士課程では学外の発表をあまりしていなかったので、2019年度で最も成長したことは、様々な学会発表、投稿を通してアカデミックの世界の「運営」の仕方、方法が前より少しづつ見えるようになってきたことである。具体的には、投稿する場合は、質的にどこまでのものを提出すれば採用される可能性があるのか、査読者のコメントにはどう対処すればよいのか、最初の原稿送付から採用されるまでどのようなプロセスがあるのか、何回の修正が必要なのか、返信内容はいかに執筆するのかなどを学ばせてもらった。また、アカデミックの世界もひと昔自分がいたビジネスの世界

も、一つの接点(業界)を決め(通じ)て、世の中と繋がっていくという本質は変わっていないと実感し、昔の仕事の経験に助けられたことも多々あると今つくづく感じている。

一方、2019 年度の不幸な事件として、1 月からずっとトップニュースを占める新型コロナウィルスがある。これに対して世界中が未曾有の懸念を抱いている。新型ウィルスの感染で亡くなった方も多数おり、残念・不安な気持ちが募りつつある世の中だが、最大のピンチは最大の契機にもなりうると思う。その一例として、今回のウィルスとの苦戦が続いている中国に対して、中国語検定試験「HSK」の日本事務局が湖北省の大学などに送った支援物資の箱に記されていた“山川異域、風月同天”という漢詩の一節が、中国で今迄にない話題を呼んでいることが挙げられる。この詩の意味は極めてシンプルで、「山も川も異なる場所に暮らしている私たちが、同じ空の下で同じ風を感じ、同じ月の下で生きています」。その次にもう一節、“寄諸仏子,共結來縁”がある、「仏の教えを学んでいる皆さんにこの袈裟をお送りします、ともに末永く縁を結びましょう」。

およそ 1300 年前、唐の時代の高僧である鑑真和尚を日本に呼び寄せた時、日本の長屋王が唐に送った千着の袈裟にこの 2 節の詩文が刺しゅうされていた。それに心を打たれた鑑真和尚が、苦難と命の危険を覚悟して日本に赴く決意を決めたという。

千年にも亘った歴史を経過した 2020 年、中国がピンチの時に、日本側が物質とともにこの詩文を中国に届けたことが、再び無数の中国人の心を動かした。この話は、中国のさまざまなメディアにも頻繁に取り上げられ、新型コロナウィルスの感染が広がる中、日本側の暖かい支援によって、中国の政府から一般市民まで、日本に対する感謝の気持ちが高まっている。民間だけではなく、中国政府も、外務省の報道官を通して、日本側から届けてくれた物質に書かれた詩文、日本の中小学校が、クラスの中の中国出身の同級生を差別視しないよう、生徒の親に配ったお知らせなど、今回の新型コロナウィルスの時期における日本側が中国に与えてくれた暖かい支援に対して、細かいところまで言葉で逐一に言及しながら、「日本側が我々に対する支援、理解、支持を心より感謝しており、心に銘じる」と発言した。私が生まれてから今迄 30 年間の人生の中、中国国内が日本に対してここまで好感を示すのは、実に初めてである。新型コロナウィルスの感染の一刻早く収束つくよう、心より願う。日中友好の新たな時代の到来を、心より願う。なお、そのような時代が早く到来するよう、微塵ながらも、助力する一員でありたい。